近代沖縄における方言札（4）
—沖縄島南部の学校記念誌を資料として—

近　藤　健一郎

はじめに

本論文は、本論集第47号、48号、49号に発表した「近代沖縄における方言札(1)」、「同 (2)」、「同 (3)」の続編である。

本論文の目的と課題はこれまでの稿と同一であるため、ごく簡単に述べるにとどめる。

方言札とは、近代沖縄の学校において、沖縄言葉を話した児童生徒に渡された罰札である。近代沖縄における言語風俗の大和化の中心と考えられる標準語教育のなかでも象徴的な事象である方言札に注目することによって、標準語教育政策が、さらには大和化政策が教室においてどのように具体化していたのかを明らかにしていきたい。これにより、近代沖縄教育史の実態を解明していくことが本研究の目的である。

本論文では、これまでの稿と同様に、学校記念誌に掲載されている回想記や座談会記録を資料として、近代沖縄において、方言札がどの時期にどの程度存在していたかを確かめることを課題とする。なお本稿では、対象を沖縄島南部の小学校に限定し、他地域及び中等学校については別の機会を期したい。

本論文が対象とする地域は、現行の行政区画でいうところの那覇市、糸満市、島尻郡のうち、沖縄島以外の島嶼を除いたものである。島尻郡に属していても、前稿で対象とした沖縄島周辺の島々にある小学校は、本稿の対象地域からは除外している。

沖縄島南部の小学校での方言札について調査するためには、まずこの地域に存在した小学校を特定する必要がある。そのため便宜的にある時点をとって特定し、分校などは特定した小学校を基本にして把握していくこととする。具体的には、沖縄教育会が編集した『昭和十年一月現在　沖縄県学事関係職員録』

を利用して、小学校を特定する。その史料によれば、1935年当時、沖縄島南部には33の小学校が存在した。この地域では戦時体制下から戦後にかけて市町村合併が行われており、当時の市町村表記では煩雑なので、現行の市町村ごとに整理し直して以下に表として掲げる。

その表には、次の事項もあわせて掲載した。現在に至るまで小学校が存続しているものについては、1935年当時の小学校名の右隣の欄に現在の小学校名を記した。さらに各小学校が刊行している創立百周年などの学校記念誌をその右隣の欄に記した。なお、『糸満小学校創立百十周年記念誌』などのように直前に出された学校記念誌以降の記事を収録したものや、『具志頭小学校創立百十周年記念誌』などのように同じ学校が複数冊の学校記念誌を刊行している場合で調査の結果方言札に関する記録を含まないものについては、書名の掲載を割愛した。学校記念誌の編集者及び出版者は期成会などとなっている場合が多いが、現在の小学校名と書名によって図書検索や問い合わせが可能であるため、正式な編集者や出版社の掲載は割愛した。

＜表１＞沖縄島南部の小学校名とその学校記念誌の一覧

現在の市町村名	小学校名（1935年）	現在の小学校名	学校記念誌の書名・刊行年
那覇市	那覇尋常高等小学校		
	天妃尋常高等小学校	天妃小学校	『創立百周年記念誌天妃』1990年
	那覇尋常小学校		
	甲辰尋常小学校		（注１）
	松山尋常小学校		（注２）
	久茂地尋常小学校	久茂地小学校	
	泊尋常小学校	泊小学校	『泊小学校創立百周年記念誌』1982年
	垣花尋常小学校		（注３）
	首里第一尋常高等小学校	城南小学校	『城南小学校創立百周年記念誌』1983年
	首里第二尋常高等小学校	城西小学校	『創立百周年記念誌りゅうたん』1988年
	首里第三尋常高等小学校	城北小学校	『創立百周年記念誌じょうほく』1996年
	小禄尋常高等小学校	小禄小学校	
	小禄尋常小学校		

	真和志尋常高等小学校（楚辺分校）	真和志小学校	『真和志小学校百年』1981年
		与儀小学校	『与儀小学校創立五十周年記念誌』1992年
	安里尋常小学校	安謝小学校	『安里・安謝小学校創立八十周年記念誌』1991年
	大道尋常高等小学校	大道小学校	『大道小学校創立二十五周年記念誌』1960年
	沖縄県師範学校附属小学校		（注４）
糸満市	糸満尋常高等小学校	糸満小学校	『糸満小学校創立百周年記念誌』1983年
	兼城尋常高等小学校	兼城小学校	『兼城小学校創立百周年記念誌』1981年
	高嶺尋常高等小学校	高嶺小学校	『高嶺小学校創立百周年記念誌』1987年
	真壁尋常高等小学校	真壁小学校	『真壁小学校百年の歩み』1981年
	喜屋武尋常高等小学校	喜屋武小学校	『喜屋武小学校創立百周年記念誌』1982年
	摩文仁尋常高等小学校	米須小学校	『米須小学校創立八十周年記念誌』1974年
豊見城村（注５）	第一豊見城尋常高等小学校	長嶺小学校	
	第二豊見城尋常高等小学校	座安小学校	
東風平町	東風平尋常高等小学校	東風平小学校	『東風平小学校創立百周年記念誌』1980年
具志頭村	具志頭尋常高等小学校	具志頭小学校	『具志頭小学校創立百周年記念誌』1982年
玉城村	玉城尋常高等小学校	玉城小学校	『玉城小学校創立百周年記念誌』1983年
知念村	知念尋常高等小学校	知念小学校	『知念小学校百周年記念誌』1985年
佐敷町	佐敷尋常高等小学校	佐敷小学校	『佐敷小学校創立百周年記念誌』1983年
大里村	第一大里尋常高等小学校	大里北小学校	
	第二大里尋常高等小学校	大里南小学校	『創立九十周年記念誌—21世紀への飛躍』1995年
南風原町	南風原尋常高等小学校	南風原小学校	『南風原小学校創立百十周年記念誌』1990年

（注１）記念誌編集委員会『甲辰校同窓会記念誌　鴻雁』甲辰会同窓会、1997年
（注２）記念誌「ふたば」編集委員会『記念誌　ふたば』松山小学校同窓会、1999年
（注３）垣花尋常小（国民）学校同窓会記念誌編集委員会『垣花尋常小（国民）学校同窓会記念誌　追憶』1986年
（注４）沖縄県師範学校附属小学校同窓会『沖縄県師範学校附属小学校　創立百周年の記念誌』1982年
（注５）2002年４月より市制が施行され、豊見城市となる予定。

沖縄島南部では、沖縄戦の地上戦闘による地形の変貌ばかりでなく、沖縄戦後に那覇港のようにアメリカ軍に接収された地域も存在する。そのため那覇市の小学校には沖縄戦で小学校の歴史を閉じざるを得なかったものがある。沖縄戦で廃校となった小学校を列挙すれば、那覇尋常高等小学校、那覇尋常小学校、甲辰尋常小学校、松山尋常小学校、垣花尋常小学校、小禄尋常小学校の６校である[(1)]。その他に、沖縄県師範学校附属小学校は、本体である沖縄県師範学校がアメリカ軍の占領下での学制改革において廃校となったため、附属小学校も廃校となっている。上記に掲げた廃校となった７校を除く26小学校は、現在に至るまで存続している。

なお管見の限り学校記念誌が確認できなかったのは、久茂地尋常小学校（現・久茂地小学校）、小禄尋常高等小学校（現・小禄小学校）、第一豊見城尋常高等小学校（現・長嶺小学校）、第二豊見城尋常高等小学校（現・座安小学校）、第一大里尋常高等小学校（現・大里北小学校）の５校であった。その一方で廃校となった小学校であっても、同窓会による記念誌を確認できた４校、すなわち甲辰尋常小学校、松山尋常小学校、垣花尋常小学校、沖縄県師範学校附属小学校については、他の学校記念誌と同様に扱った。上記の＜表１＞の注で掲げた４つの記念誌である。

１．学校記念誌に掲載された回想記・座談会記録はどのように方言札に言及しているか？

学校記念誌に掲載された回想記や座談会において、方言札に言及しているものを以下に列挙する。ただし紙幅の関係から、戦後に関する回想者の氏名やその記録の題目などのみを示した。方言札に言及しているものとして列挙した基準は、方言札に関する体験のほかは次の通りである。(1) 方言札そのものに言及していなくても、方言を話したことにより罰を受けたとする回想記は掲げた。方言札の存在を記している他の回想記を補う可能性があるからである。このため、標準語励行（あるいは共通語励行）の回想のみが述べられているものは掲げないこととした。(2) 方言札は存在しなかったという回想も掲げた。方言札の存在する時期や地域を考察する上で参考になる可能性があるからである。(3)

方言札に言及しているものであっても、自身の体験でない伝聞や、方言札に関する意見などは割愛した。方言札の存在をどれだけ確かめられるかを調べるためには、体験したことについての回想のみを拾うことが必要だからである。

列挙するにあたって、およその年代を把握するために、便宜的に、1900年代後半、1910年代前半、同後半、1920年代前半、同後半、1930年代前半、同後半、1940年代前半、戦後にわけて列挙することとする。ただしこの年代は、何年生の時のことと明確に回想している場合を除き、小学校在学の半ばにあたる小学校中学年の年代に区分した。あわせて、回想している人の小学校への入学年度をそれぞれの氏名の直後に記した。これは回想などにおいて入学年に触れている場合はそれにより、また卒業年に触れている場合は逆算したものを原則とした。なかには入学年や卒業年に触れていないものもあるが、生年や卒業生名簿、校長の名前などから入学年を推測し、？を付けた。なお、引用文中の省略は…で、座談会での回想において他者をはさんで再び発言している場合は／で表し、また明らかな誤字脱字は修正した。

①天妃尋常小学校

・1930年代後半

あの時は、方言ふだをかけさせられる時代でしたが、天妃はそんなのなかったです。ヤマト方言は使うんですけども、これはなかったです。

＜仲宗根利（1935年入学）「座談会　思い出を語る」125頁＞

②甲辰尋常小学校

・1930年代前半

学校では普通語（標準語）の励行がやかましくいわれていた。校内においては一切方言の使用は禁止されていた。各クラスに日直のような者が決められていて、校内で方言を使用した者は日誌に氏名を記入するようになっていた。

＜清村巧（1930年名護尋常小学校より四年生に転入）「鴻雁に思う」154頁＞

③松山尋常小学校

・1930年代後半

忘れられないものとしては、五年次の大掃除の日のこと、掃除も一段落し仲間とふざけながら二言、三言、方言を使っていたところを校長先生に聞き咎められ、それが宿直室近くでの出来事だったこともあって、そこにあった洋傘の柄で、頭をゴツンとやられ更に職員室にまで連れて行かれて、夕方まで正座をさせられたことである。　　＜平良幸造（1934年入学）「学窓雑感」127頁＞

④泊尋常小学校

・1910年代前半

（「そのころ、方言札というのはありませんでしたか」との司会の問いに）那覇の小学校では、どこでも無かったはずですよ。

＜真栄田義見（1909年入学）「座談会　一〇〇年を語る」205頁＞

泊では、方言札というのはありませんね。

＜親泊興輝（1911年入学）「座談会　一〇〇年を語る」205頁＞

・1920年代前半

（「そのころ、方言札というのはありませんでしたか」との司会の問いに）泊では無いですね。それを使った覚えは無いし、話はよう聞いていますが、泊では無かったと思いますよ。

＜又吉トヨ（1918年入学）「座談会　一〇〇年を語る」205頁＞

・1930年代後半

私たちが在学中の一時期、クラス内で方言札を回しあったことがあります。他の規則や言いつけはともかく、これには皆が弱りました。方言の中で生まれ、方言の家庭で暮らしている連中が、学校にでてきていきなり大和口（やまとぐち）に切りかえられる訳がない、学友たちの間で大和口で話したことは、ついに一度もありませんでした。ある日、校長先生が全校生徒に「標準語を使っている人は？」と聞いたのにこたえて、二、三人が立ち上がったのをみれば、たまたま東京から転校してきたばかりの姉弟だった、ということもありました。

＜名嘉原盛康（1934年入学）「中間点から」196～197頁＞

・1940年代前半

方言札というのは無かったが、標準語励行は、うんと致しましたね。「一億の心を結ぶ標準語」と標語もありまして、「一億の心を結ぶ標準語だから正しい標準語を使わなければ」ということでやりました。

＜又吉トヨ（戦時下に教師として在職）「座談会　一〇〇年を語る」217頁＞

⑤垣花尋常小学校

・1920年代前半

僕等の小学校時代には、琉球音楽はおろか、沖縄の方言をつかっただけでも掃除当番をさせられたりして罰を課された時代である

＜宮里秋男（1920年入学）「小学校の思い出」88頁＞

・1920年代後半

当時の小学校は方言一辺倒の時代であった。標準語（大和口）の習慣を身につけさせようと、先生方は必死になって標準語励行を進めたものだが、その大和口が仲々思うように口から出て来ない。大和口を使うことが恥ずかしくてテレ臭かったのである。そこで考え出されたのが名案の方言対策であった。方言を使った現行犯に「方言札」が渡される仕組みである。終業時までこの方言札を持った者はその日の掃除当番が課された。大声で方言でも使ったら忽ち方言札が飛び込んでくるので、あちらこちらでヒソヒソ話が増える。唖と同然一日中黙り続けた者もいたからたまらない。毎日毎日の掃除当番を諦めきっているのは腕白のウーマク達に限られていたが、私も嫌になるほど掃除当番の奉公したものでした。＜平良真弘（1926年入学）「小学校時代の想い出五題」169頁＞

・1930年代前半

授業以外ではもっぱら方言（沖縄口）だったので、学校側では「標準語励行」の標語を貼り、方言を使った者は罰として首から「方言札」を吊させたりして「大和口」励行に努力したが総べて「弾は空砲」で徒労に終わるばかりであった。　＜与儀幸信（1927年入学）「回想」192～193頁＞

・1930年代後半

運動場では、休み時間ともなると、解き放たれた生徒が、喜々として飛び回っている。その群の中に、首から大きなフダをぶら下げている生徒がいる。あ

の悪名高い、方言フダだ。遊びに夢中になっていると、不意に背中を強く叩かれる。思わず「アガー」と叫んでしまう。すると、「今方言使ったなあ」と言って、すかさず方言フダを渡す。「アガー」と言った生徒は、しぶしぶ大きなフダを首からぶら下げて、次の者をねらって歩く。僕も一度この「ワナ」に引っ掛かり、首からぶら下げて歩いたことがある。

＜比嘉良夫（1933年入学）「昭和八年四月入学昭和十四年三月卒業の背景」268頁＞

（三年生の時のこととして）けふ　がっこうで　ともだちに　「がっぱやー」といったので、　ほうげんふだをもって　ろうかにたたされました。

＜船越実光（1937年入学）「戦時下の垣花小学校」303頁＞

⑥首里第一尋常高等小学校

・1930年代後半

（高等小学校二年生のときのこととして）分散朝礼の或日、冨名腰先生が今朝の登校時に方言を使った者は手を上に挙げよと言われたので、私は思わず手を挙げた処、朝礼解散後先生に呼び出され、正殿の方に連れ出された。多分四、五人位だったと思う。連れ出された私達は正殿の大広間の中央に正座させられて、君達は高学年であり、模範を示すべきでありながら方言を使うとは何たることだと三十分位説教されたので、私達は申訳ありませんと両手をついて謝りましたが、先生は赦しませんでした。先生は今日一日中ここで正座して反省しろと言って先生は正殿を出ていったのである。

＜伊佐真明（1931年入学）「方言と罰」96頁＞

⑦首里第二尋常高等小学校

・1920年代後半

つけ札といって、皆用心していますから、でも早く相手に渡さないといけないので、わざと使うようにしむけましたね。（笑）

＜石川盛亀（1923年入学）「座談会－城西小学校の移り変り－」168頁＞

・1930年代か？

方言札というのもありましたね。誰かが方言を使うとすぐ相手に渡しました

ね。私も四、五年の頃随分もらいましたね。

＜玉城清永（入学年度不明）「座談会－城西小学校の移り変り－」168頁＞

・戦後 ＜小橋川久光（1951年、中頭より4年生に転入）「標準語励行」201頁＞

⑧首里第三尋常高等小学校

方言札への言及は確認できなかった。

⑨真和志尋常高等小学校・同楚辺分校

方言札への言及は確認できなかった。

⑩安里尋常小学校

・1940年代前半

先生方のウチナーグチに対するご理解のお陰で、安里国民学校には「方言札」はありませんでした。

＜松村興正（1938年入学）「安里・安謝小学校創立八〇周年記念座談会」108頁＞

⑪大道尋常高等小学校

方言札への言及は確認できなかった。

⑫沖縄県師範学校附属小学校

方言札への言及は確認できなかった。

⑬糸満尋常高等小学校

・1920年代前半

高等科の時に普通語（標準語）奨励のため、方言札というのがありました。この札は校内で方言を使った人に渡され、次に方言を使った人を見つけて、次々に渡していくのですが、最後まで札を持っている人は放課後教室の掃除をすることになっていました。ところが、生徒達は校門を出るといきなり、方言札のことは忘れたかのように、思い思いに糸満ぐち小でべちゃくちゃ……。

＜原国マキ（1918年入学）「懐かしい海の香りとガジュマル」266頁＞

・1920年代後半

方言札を持った人は、策を弄し友人に方言を使わせて札を申し送ったものでした。　＜玉沢一郎（1926年入学）「瞼に浮かぶ母校・先生・学友等」207頁＞

・1940年代前半

私達はつい方言を混ぜて使いよく怒られた。その罰し方は方言札を首からぶら下げさせたり、教壇の上に並んで正座させ、太もゝの上を皮靴をはいた先生が歩くという方法であった。

＜金城健（1939年入学）「太平洋戦争中の学校生活」223頁＞

⑭兼城尋常高等小学校

方言札への言及は確認できなかった。

⑮高嶺尋常高等小学校

・1910年代後半

僕は強くなかったので、ほかの人に渡すことができなくてね（笑い）。最後まで持っていて、そうじ当番までさせられましたよ。方言札には閉口しましたよ（爆笑）。

＜国吉真忠（1914年入学？）「座談会 母校を語る 大正初期の頃」235頁＞

あの頃、方言札がありましたね（あったなあ、との声）。方言を使うとその札を渡すんですよ。相手にわざと方言を使うようにしむけて渡しましたよ（笑い）。

＜伊敷勝義（1916年入学？）「座談会 母校を語る大正初期の頃」234～235頁＞

・1930年代後半

「方言札」なるものがあり、方言で話した者がもっていて、周辺で方言を話す者を見つけた場合には、それを手渡す

＜国吉真勇（1936年入学？）「小学校時代の断章」175頁＞

・1940年代前半

学校で方言を使おうものなら説教なんてものではない。体罰ものであった。

共通語励行について、こんな思い出がある。3年か4年のころだったと思う。当時は1年生から高等2年生まで部落を出るときから2列縦隊にくんで登校していた。高等2年生の指揮の下に。そして登校途中に、方言使用者をしらべるのである。使用者はひき出されて、そこで高等2年生の鉄拳、足ばらい、背負いなげ（体格の大きい人は免除）をちょうだいするのである。「君は方言使ったか。」「はい」「なんと言った？」「アガーと言いました。」「こっちこい。」ピシャッ！ドスン！である。

学校でも字担任の先生に、方言を使ったということで運動場の石ころの上に何十分間か正座させられたことがある。あの時の苦しかったこと！罰が終わるころからは、足はもう自分のからだについているから自分の足だとわかるようなもので、ほとんど感覚がなくなっていた。

＜屋良朝清（1938年入学）「思い出あれこれ」190頁＞

⑯真壁尋常高等小学校

・1910年代～1920年代前半

共通語励行が進められて方言札がありましたね。

＜発言者不明「座談会 大正の卒業生（大正1年～大正14年）」99頁＞

・1920年代後半～1930年代前半

わんぱく者は、自分は方言を使っても力の弱い者に方言札をおしつけていつもいばっていた。こういう子供は、いつまでも方言は直りませんでした。最初は「方言では」と前おきして使ったら、けっこう許されたものですから。「方言では」ということを言ったとか言わないとかで、けんかになったこともありました。

＜発言者不明「座談会 昭和の卒業生（昭和元年～11年）」102～103頁＞

方言札というのがありましたね。

＜与儀スミ（1927年～1934年まで教師として在職）「恩師の思い出」120頁＞

・1930年代後半～1940年代前半

方言札がありましたね。方言札を持っている人は次に方言をつかう人を見つけるまで札を持っていなきゃいけないから、いかにして相手に方言を使わせる

か色々と作戦をねりました。

＜発言者不明「座談会 昭和の卒業生（昭和12年～昭和20年）」108頁＞

・1940年代前半～戦後

方言札というのがあって、方言をつかった人は札をさげられました。他に方言使った人をみつけるまで、ずっと持っていなければいけないので、わざとけっとばして「アガー」といわせて渡す。標準語を使わせるためのことでしょうが、戦後までありましたね。

＜発言者不明（1940年入学？）「座談会 昭和の卒業生（昭和21年～昭和30年）」113頁＞

・戦後

今週の目標というのがあって、標準語励行や早登校をすすめましたね。方言札があって、方言を使った人に無言に渡していました。

＜発言者不明「座談会 昭和の卒業生（昭和31年～昭和54年）」116頁＞

⑰喜屋武尋常高等小学校

・1900年代後半

方言を使うと罰があり、男はほとんど校長先生にアライ体操で使う棒でよくたたかれた。

＜慶留間由進（1905年入学）「小学校が四年制から六年制になる」94頁＞

・1940年代前半

想い出のひとつに「方言札」なるものがあった。当時は学校以外の場所ではほとんどの児童が方言をつかっていた。そのため標準語励行がやかましく、その方策として方言で話す人を見つけるとその札を輪番に渡したものである。

＜前門衛左（入学年不明。ただし1944年には在学）「小学校時代の思い出」106頁＞

・戦後　＜大城義雄（1949年入学？）「私の思い出」107頁＞

＜志茂トシ子（1951年入学）「なつかしや小学時代」222頁＞

⑱摩文仁尋常高等小学校

方言札への言及は確認できなかった。

⑲東風平尋常高等小学校

・1920年代前半

私達の小学校時代には普通語奨励の為に方言札というのがあって、校内で方言を使う生徒にはすぐ方言札が渡されて授業後の掃除当番にさせられたものです　　＜山城ハナ（1918年入学？）「母校の創立百周年を祝す」113頁＞

・1940年代前半

方言札というのがあって方言を使った場合首にかけさせられたですね。

＜仲座清次郎（1938年入学）「座談会 戦時中の生徒」248頁＞

・戦後

＜金城一夫（1961年から1966年まで教師として在職）「教員駆け出し時代」121頁＞

⑳具志頭尋常高等小学校

・1910年代前半～1920年代後半

方言札もあったなあ…。標準語がわからなくて言えない時は「方言で言うと……」と、言ってから話しをしていた。

＜発言者不明「具志頭小学校を語る（座談会） 明治・大正の卒業生」76頁＞

・1940年代前半

或る日先生は抜打ち的に、「今誰が方言札を持っているか。」と、聞かれた。その時持っていたのが私であった。手を挙げると、先生は例の如く黙って人差指で近くまでくるようと合図され、黒板の上にいつも置いてある細い鞭をとって思わせぶりに二、三回振っておられた。先生の前に進み出てうつむいていると、思わず「ヤシー（休め）気をつけ」と、号令をかけて私の姿勢を正され、しばらく間をおいてからおもむろに尋問を始められた。「君は一体どんな方言を使ったかね。」と、聞かれた。私は如何にすれば鞭打ちの罰から免れるかと思いをめぐらせながら、「ハンマー！！」と、言いましたと答えた。これにはさすがの先生もしらけたらしく、一瞬相好を崩されたが、再び真顔にかえられて、こういう場合は「あらっ！！」と、言うんだよとユーモラスな身振りをされ、しまいには声を出して笑われた。私は辛うじて執行猶予ということになり、両手をピシット打たれる罰はまぬがれた。色々と説教をされたが、国策として

の標準語励行ということは口にされなかった。先生のお話しでは方言ばかり使っていると標準語の発音が不明瞭になるからいけないということで、実例を挙げて説明しておられたが、詳細は忘れてしまった。

＜真座琢磨（1937年入学）「恩師 仲西盛久先生」91～92頁＞

学校では語学の向上の為か「方言」を使うことを禁じていた。より効果を修めるために「放言札」が颯爽とまかり通った。油断もすきもない、だれが“放言札”を持っているかわからない。所持者はカッコ悪いので人に渡すことのみを狙っていたからである。その為には手段を選ばなかったので、毎日のように小さいトラブルがあったように思う。

＜新城安盛（1938年入学）「悲惨な少年時代」95頁＞

・戦後＜前森誠光（1946年入学）「戦後の混乱と苦難の初等学校時代」100頁＞

㉑玉城尋常高等小学校

・1900年代後半

方言札はありましたよ。次の方言する人を見つけるまでは持ち続けていました。札は持っていても罰は与えなかったのです。

＜安次富信雄（1904年入学）「座談会 明治・大正時代の卒業生」157頁＞

・1920年代前半

（「みなさんは学校では普通語をお使いになりましたか」との司会の問いに）そうですね。方言とまぜてつかいました。私は方言札を貰ったことはありませんが、私が覚えているのは、垣花の知念松盛さん本田清さん達が高等二年の時、私の兄は六年生でした。兄が方言したと言って高等科生にたたかれているのを見てかわいそうでした。方言札のことで時々トラブルがありました。

＜当山清永（1918年入学）「座談会 明治・大正時代の卒業生」157頁＞

・1930年代前半

方言札はありましたよ。四角い板に紐をつけ首からつるして、方言したことが直ぐわかるようにしていました。お互い同志でもへんな言葉をつかって、しいて方言させようと誘導し、方言札を渡す人もいました。／（「方言札は学級にいくつくらいありましたか」との司会の問いに）各学級一個ぐらいじゃなか

ったかと思います。

＜久保田徳善（1928年入学）「座談会 昭和元年から二〇年までの卒業生」178頁＞

（「方言札持たされた時、罰もございましたか」との司会の問いに）罰はなかったと思いますがね。はっきり覚えていませんが、次ぎ次ぎ廻すだけだったと思います。

＜当山吉男（1928年入学）「座談会 昭和元年から二〇年までの卒業生」178頁＞

気の弱い子は一回方言札を渡されると、なかなか次の方言した人を見付けきれないので、ウーマクが来て「お前の弁当をくれるなら僕が方言札を変わってやる。」ということもありました。

＜大城孫一（1930年入学）「座談会 昭和元年から二〇年までの卒業生」178頁＞

・1930年代後半

五年生のとき、校内では標準語励行のお札が出た。方言を使った者は、方言札を首にかけられる。そんなとき、悪童に足を踏んづけられた私が、「アッカー。」ともらしたことから、「それっ方言を使った方言札をかけろ。」というのである。私はそんな方言はないからいやだと断り大喧嘩となった。相手の鼻血が私の洋服を汚した。私は暴力を振るったということで職員室の押入れに御用となった。入れた先生のお顔はなぜか思い出せない。中は真暗だし心細かった。時々先生方の笑い声が遠くに聞こえるだけである。授業の鐘が一つ二つ重なるうちに寝入ってしまい、叩き出された時はもはや放課後だった。

＜川崎正剛（1935年大阪から1年生に転入）「心のふるさと」239頁＞

・戦後

＜大城経子（1950年入学）「座談会 戦後の卒業生（昭和二一年～昭和三一年）」196頁＞

＜安次富哲雄（1946年疎開先の熊本から1年生に転入）「思い出あれこれ」248頁＞

㉒知念尋常高等小学校

・1900年代後半

沖縄語を使ふと罰せられる規定だったのに一寸した不注意から知念門小にガヂラーとからかつて放課後は玄関側の梯梧の下に居残りを命ぜられて泣き出したこともあつた。

＜仲里文英（1906年入学）「知念小学校を想ふ」602頁＞

・1910年代後半

あの頃、上級生が方言札をもっていて、誰かが方言を使うとすぐ方言札を渡していました

＜照喜名名雄（1914年入学？）「座談会 小学校時代の思い出を語る（明治生れ）」148頁＞

・1920年代前半

方言（沖縄語）をつかうと方言札を渡されて罰されました。

＜大城清（1919年入学）「知念小学校の思い出」212頁＞

・1930年代後半

標準語（共通語）励行なるものがあって、校内で「方言」を使用すると上級生から「方言札」を渡されたものです。いつの頃から始まったか定かでないが、私が初めて方言札を渡されたのは、三年生の時（昭和十年）でした。方言札を渡された者はその日の放課後、職員室前に集められて、それぞれの担任の先生から長々と説教を食ったものでした。長い説教の間、立ちんぼですから足は痛くなるし、腹は減るで中には泣き出す子も出る始末で、先生の長い説教は大変な苦痛でした。

しかし、方言札から逃れる術がありました。それは、方言を使用する場合、冒頭に「方言でいったら」をつけ加えることでした。そのため、めったやたらと、「方言で言ったら」を連発し、方言と標準語をゴチャ混ぜにした、いとも珍妙な標準語が堂々とまかり通っていました。

＜新垣仙勇（1933年入学）「方言札」220頁＞

（「方言札というのはありましたか」との校長の問いに）ありましたが、女の子はめったに方言札まではかけられませんでした。しかし、男の子はこの方言札で苦しい目にあったのではないですか。

＜玉木シゲ子（1936年入学）「座談会 小学校時代の思い出を語る（昭和生れ）」174頁＞

・1940年代前半

話す場合、共通語でわからないところは「方言で言うと」という前おきをつけると許されるという風習でしたね。この「方言で言うと」がしまいには「方言だったら」になっていましたね。あの頃、とにかくこの方言札なるものは、

こわい存在でした。

＜大城盛方（1939年入学？）「座談会 小学校時代の思い出を語る（昭和生れ）」174頁＞

（「本土から帰ってきて、こちらのことばで困ったことはなかったですか」との司会の問いに）いいえ、ことばについては母がよく教えてくれていましたから、方言札なんか別にこわいと思ったことはありませんでした。

＜山田静子（1940年入学）「座談会 小学校時代の思い出を語る（昭和生れ）」174頁＞

・戦後　＜仲宗根幸男（1946年入学）「小学時代の思い出」231頁＞

＜親川正雄（入学年不明）「具志堅初等学校を語る（座談会）」368頁＞

＜新里初子（入学年不明）「具志堅初等学校を語る（座談会）」368頁＞

㉓佐敷尋常高等小学校

・1920年代後半

「方言札」と墨で黒々と書かれた札が、各教室にありました。方言をした子に渡される。次に方言した子が見つかると、その子に渡される。授業が終わるまでに回数の多い者は、先生の説教を受ける破目になり、時には掃除当番にまわされる事もありました。

＜当山ツル（1923年入学）「私の小学校時代」156頁＞

方言札を最後まで持たされ、掃除当番をさせられたことは数えきれない程ありました。　＜西村又吉（1926年入学）「創立百周年にむけて」160頁＞

方言札は恐かった。　＜崎山喜録（1926年入学）「思い出」434頁＞

三年の頃は「方言札」が思い出されます。当時標準語（共通語）励行が、盛んに唱えられ、ちょっとでも方言を話そうものなら、たちまち「方言札」が、胸にぶら下がる仕組みになっていたので、それがこわさに廻らない舌で「直訳標準語（ウチナーヤマトグチ）」を組み立てて、話したものです。受持の玉那覇有徳先生（首里の方）のあだ名が、ハブタ「玉菜（たまな）」でしたが、あるとき、「お前の先生のあだ名は何というんだ」と問われ、うっかり「ハブタ」だと言ったとたん「方言札」がぶら下った苦い経験を持っています。

＜中山重信（1927年入学）「カタカナの本の頃」424頁＞

・1930年代前半

遅刻や方言を使った時には、よく叩かれ、方言札を首にかけて廊下に立たされ、学事奨励会（各支部ＰＴＡ）や家庭訪問の時に報告される

＜山城清勝（1928年入学）「私の佐敷尋常高等小学校の思い出」163頁＞

・1940年代前半

方言札というのがあって、方言を使うことが知られたら最後「私は方言を使いました」と書いた札を首から掛ける仕組になっていました。札をつるした者は、方言使用者をさがすのにほんろうしたものである。

＜真栄城玄盛（1940年入学）「思い出」178頁＞

・戦後　＜大城保子（1946年入学）「なつかしい初等学校時代」185頁＞

㉔第二大里尋常高等小学校

方言札への言及は確認できなかった。

㉕南風原尋常高等小学校

・1900年代後半

小学校までは四年生頃から方言フダがあり、男の子達に追っかけられて、ころんだ時アイターとかアガーヨーとわざと言わす為、追いかけられるのが大変こわく、逃げまわりました。

＜大城ウト（1904年入学？）「長生きしてよかった」154頁＞

・1910年代後半

私の小学校時代の思い出は「方言札」です。長いこと方言を使っているものですから、共通語で話すのは友だち同志でもむつかしかったですね。新一郎さんのお父さんが亡くなられて、お葬式に行った時に友だちと方言で話しているのがばれて、先生に叱られたことがありますが、その時口答えをしたら、こっぴどく叩かれました。

＜仲里清喜（1915年入学？）「明治生まれの座談会」147～148頁＞

方言札罰制度があり、札を渡された生徒は教室の清掃をさせる等の罰則があった。　＜赤嶺良久（1913年入学）「想い出あれこれ」159頁＞

・1930年代前半

方言札がありました。方言札をもらったら罰として掃除をさせられましたよ。

＜金城フミ（1928年入学？）「大正生れの座談会」172頁＞

わざとちんむりて「アガー」と言わせて方言札を渡したり（笑…笑）。

＜神里勇誠（1932年入学？）「大正生れの座談会」172頁＞

・1930年代後半

うちの字出身の方ですが、学校からの帰りがけにわざわざ、うぐいすのまねをして、チョッ、チョッと鳴いて、誰かがチョッチョングワーと言ったため、あんたは方言を使ったと言って方言札を渡されました。

＜金城金成（1934年入学？）「座談会　昭和戦前編」288頁＞

家まで方言札を持ち帰り、もう二十四時間ですよ。誰か方言を話す人を見つけてこの札を渡すまで、勉強どころじゃないですよ。これを捜すのに一生懸命だから、弱い者を捜してね、シカサーニヨーなにか方言させてから君は方言を使ったからといって渡す。

＜知念邦夫（1936年入学？）「座談会　昭和戦前編」288頁＞

・1940年代前半

（「方言札については、いかがでしょうか」との司会の問いに）方言札ですか。あれは、無理に方言を使わして渡すという風な…。私はあんまり持った記憶はないんですが、あれは多分紀元二千六百年ですか、昭和十五年頃からではなかったかと記憶しています。

＜神谷安盛（1936年入学？）「座談会　昭和戦前編」287頁＞

方言札にまつわる私の思い出は、木登りですね。木登り遊びは、どうしても方言の歌が出る訳ですね。歌をうたったら方言札を渡す。

＜豊岡春子（1941年入学？）「座談会　昭和戦前編」288頁＞

「方言札」があって、方言を使うとその「札」を持たされたものです。

＜真謝貞子（1942年入学？）「ふる里は遠くに在りて思うもの」357頁＞

・戦後

＜仲里安則（1958年入学）「たんぽぽ劇団が建立したお地蔵さんと悲しい思い出」329頁＞

＜千田豊子（1945年入学）「小学校時代の想い出」347頁＞

2．学校記念誌に掲載された回想記・座談会記録から方言札の存在がどのくらい確かめられたか？

沖縄島周辺の島々の小学校の学校記念誌からは、以上の方言札に関する回想記・座談会記録を得ることができた。それにより、各小学校ごとに、どの年代に、どの程度の記録が得られたかを一覧表にまとめたものが、以下の＜表＞である。それぞれの記号の意味は以下の通り。

○　方言札の存在に言及しているもの。

◎　方言札の存在に加えて、何らかの罰（ただし、方言札を首から下げるということを除く）を受けたことについても言及しているもの。

△　方言札そのものへの言及はないが、方言を話したことによって何らかの罰を受けたことについて言及しているもの。

×　方言札はなかったと言及しているもの。

＊　方言を話さなかったことによる賞について言及しているもの。

／　小学校あるいは分校が設置されていなかったことを表す。

それぞれの印の直後にある数字は回想をしている人数を表している。

＜表２＞方言札に関する回想記・座談会記録の一覧

小学校名	00年代後半	10年代前半	10年代後半	20年代前半	20年代後半	30年代前半	30年代後半	40年代前半	戦後	注
天妃							×1			
甲辰						△1				
松山							△1			
泊		×2		×1			○1	×1		
垣花	／			△1	◎1	○1	○1◎1			
首里第一							△1			
首里第二					○1				＊1	1
首里第三										
真和志										
（楚辺）	／	／	／	／						
安里	／							×1		
大道	／	／	／	／	／					
師範附属										
糸満				◎1	○1			◎1		
兼城										

高　嶺			○1◎1				○1	△1		
真　壁										2
喜屋武	△1							○1	○2	
摩文仁										
東風平				◎1				○1	△1	
具志頭								○1◎1	○1	3
玉　城	○1			○1		○3	○1		○2	
知　念	△1		○1	○1			○1◎1	○2	○2◎1	
佐　敷					○2◎2	◎1		○1	○1	
第二大里										
南風原	○1		○1◎1			○1◎1	○2	○3	○2	

（注1）1930年代　○1
（注2）座談会での発言者が明記されていないため、すべて、およその年代が分かるにとどまる。
1910年代～1920年代前半　○1。　1920年代後半～1930年代前半　○2。
1930年代後半～1940年代前半　○1。　1940年代前半～戦後　○1。戦後　○1。
（注3）1910年代前半～1920年代後半　○1。

まとめ

（1）方言札の実態について

以上のように、学校記念誌に掲載された回想記・座談会記録から、方言札の実態についての資料を得ることができた。それらから方言札の実態について以下のことを指摘できる。なお、丸カッコ内は、回想をしている人が通った学校名とその人の氏名である。

第一に、方言札の基本的特徴について改めて確認できた。沖縄言葉を話した児童が方言札を首からぶら下げられ、その児童は沖縄言葉を話した児童を見つけて渡すのである。これはこれまでの調査結果と同様である。なかには方言札でなく、「つけ札」と呼んでいた事例も見られた（首里第二・石川盛亀）。そして、方言札を首から下げるということ自体の罰の他に、太股の上を皮靴を履いた先生に歩かれたり、掃除当番にされたり、廊下に立たされたりという罰があった（糸満・金城健、東風平・山城ハナ、垣花・船越実光）。このような罰を教師でなく上級生が行う場合もあった（高嶺・屋良朝清）。方言を使わないようにさせる相互監視体制の最たるものといえるだろう。

第二に、児童の方言札に対する多様な対応を見いだすことができた。方言札を持っている児童が他の児童を不意に叩くなどにより「アガー」などと言わせて方言札を免れたり、「方言で言うと」と言ってから方言で話すことにより方言札を渡されずに済んだりという対応が見られた（垣花・比嘉良夫、知念・大城盛方）。このようなこれまでの調査でも見られた行動を確かめることができた。その他に、お弁当と交換で方言札を受け取る場合があったり（玉城・大城孫一）、わんぱくな児童が他の児童に方言札を押しつけたり、逆に強くないから他の児童に渡せなかったりという回想も見られた（真壁・不明、高嶺・国吉真忠）。このような児童の対応を象徴的に表現したのが、「無理に方言を使わして渡すという風な…」という発言であろう（南風原・神谷安盛）。

第三に、方言札の用いられていた範囲についても資料を得ることができた。一方で校門を出ると方言を話し出すという回想のある一方で（糸満・原国マキ）、家まで持ち帰り方言を使う児童を探したという回想もあった（南風原・知念邦夫）。これは時期や地域によって、指導のあり方が異なることを示している。この点は、方言札の特徴についておおよその時期区分をする指標となるであろう。

第四に、教師の意識についても資料を得ることができた。泊尋常小学校の教師であった又吉トヨは、方言札は用いなかったけれども標準語励行を行う際の意識として、「一億の心を結ぶ標準語だから正しい標準語を使わなければ」と考えていたという。この点については、同時代資料を用いて検討を加える必要があるだろう。

最後に、戦後の回想になるが、沖縄言葉を使わず標準語を話したことによる「賞」の具体的な内容として、賞状をもらったという事例があった（首里第二・小橋川久光）[2]。

（2）方言札の存在について

作成した<表>から、方言札の存在について以下のことを指摘できる。

第一に、方言札が存在したことが確かめられた小学校の一方で、那覇市のほとんどの小学校では方言札の存在を確かめられなかった。むしろ方言札の存在

を否定する資料が得られたほどである（天妃・仲宗根利）。那覇市の小学校での方言札の存在については、方言論争（1940年）当時から問題になっており、同時代資料の整理を通じて明らかにしていくことが必要である。今後を期したい。

第二に、今回の調査で初めて1900年代後半の方言札についての資料が得られた。玉城尋常小学校の安次富信雄と南風原尋常小学校の大城ウトの回想である。後者は入学年及び何年生の時の回想かが明記されていないため、1897年生まれということから推測しての時期の特定であるが、どちらもこれまでの調査の中で最も古い資料である。のみならず、これまでの研究によれば、方言札は1907年頃から登場したとされており[3]、それと同時期の資料として位置づくものである。

第三に、学校記念誌である以上、当然含まれる戦後の回想記・座談会記録によって、戦後の方言札の存在についても改めて確かめることができた。

次稿では、沖縄島中部地域の学校記念誌を資料として、同様の調査を行う予定である。

——注——

（1）沖縄県教育庁総務課編『沖縄県公立小学校変遷史』沖縄県教育委員会、1994年によれば、垣花尋常小学校は現在の垣花小学校の前身と、また小禄尋常小学校は現在の高良小学校の前身とされている。しかし、垣花尋常小学校同窓会記念誌『追憶』（1986年）には垣花尋常小学校が現在の垣花小学校とは関係を持っていないことが明記されており、また『高良小学校・幼稚園創立五十周年記念誌』（1996年）では学校沿革を沖縄戦直後から始まるものとしている。ここではそれらの記述に従い、両校ともに直接の関係を持たないものとした。

（2）資料として、小橋川久光（1951年、中頭より城西初等学校4年生に転入）の回想を掲げておく。

私は小学校の頃、賞というものにあまり縁がありませんでしたが、数少ない賞の中で最も大切にしているものに、「標準語優良賞」というものがあります。それは印刷物でなく校長先生の自筆であり、それに校長印が首里市城西初等学校となっており…（小橋川久光「標準語励行」、『創立百周年記念誌りゅうたん』1988年、201頁）

（3）外間守善『沖縄の言語史』法政大学出版局、1971年、81頁。

（付記）
・本論文は、平成13年度科学研究費補助金（基盤研究Ｃ２）「近代日本における標準語教育の歴史的研究―沖縄を中心として―」（課題番号11610279）による研究成果の一部である。
・本論文の調査にあたって、沖縄県立図書館、沖縄県公文書館史料編集室、那覇市立中央図書館、琉球大学附属図書館に、閲覧の便宜を図っていただきました。記して感謝します。